

# キラリ TOKYO

— 輝く企業の現場から —

第151回 株式会社オリィ研究所



代表取締役 CEOの吉藤オリィ氏がつけているのは、体に装着して使える「OriHime eye」の試作品。通常のOriHime eyeは、視線入力装置とパソコンなどを組み合わせて使う

## 不登校経験が「居場所づくり支援」の原点

オリィ研究所が掲げるテーマは、「コミュニケーションテクノロジーで人類の孤独を解消する」というもの。現在は、病気やけがで学校に通えない子どもやひとり暮らしの高齢者、身体障がいなどの理由で外出が難しい人などを支えるために各種製品・サービスを開発している。その代表格が、カメラ・マイク・スピーカーを搭載した、高さ20cmほどの小型ロボット「OriHime(オリヒメ)」。学校や会社などに置くことで、まるでその場に本人の分身がいるような感覚を得られる。

同社の共同創設者で代表取締役・CEOを務める吉藤氏は、過去に3年半の不登校を経験したという。

「小学5年生の頃、私は病気で学校を長期間休みました。そして久しぶりに登校したとき、学校が自分の居場所ではなくなったと強く感じ、不登校がはじまったのです。その経験が、人々の孤独を解消できないかと考えた原点でした」(吉藤氏)

吉藤氏は大学在学中の2012年、東京都中小企業振興公社が主催する学生向けビジネスプランコンテスト「学生起業家選手権」に出場。OriHimeの原型となったロボットの企画案により、優秀賞と「オーディエンス賞」をダブル受賞した。

「不登校で家から出られない、あるいは障がいなどで体を動かせないという人にとって、自分が当たり前のように存在できる居場所を確保するのは難しいもの。私たちの使命は、そうした人々を技術によって手助けすることです」(吉藤氏)

## 分身ロボットで新たな働き方を生み出した

OriHimeの開発当初、吉藤氏はよく「テレビ電話でも同じ機能が果たせるのでは?」という質問を受けたという。しかし吉藤氏は、あえてロボットという形にこだわった。

「テレビ電話は、要件が終わったら切るのが普通。自然にずっとつながっていることはできません。また、音声などの情報は伝えられても、人間の肉体が生み出す『存在感』は表現できないのです。だから私は、その人がまるでそこにいるような『分身ロボット』をつくりました」(吉藤氏)

ただし、オリィ研究所は「単なるロボットメーカー」ではない。技術でコミュニケーションの形を変え、孤独の解消を目指す企業である。その一環としてオープンさせたのが、体高120cmほどの大型分身ロボット「OriHime-D」が接客・配膳を行う「分身ロボットカフェ『DAWN』」だ。

「OriHime-Dを操作する『パイロット』は、筋萎縮性側索硬

## 技術でコミュニケーションの形を変える

### [会社概要]

代表：代表取締役 CEO 吉藤 オリィ (健太郎) 氏  
業種：「分身ロボット」など、人々の孤独を解消する  
製品・サービスの開発・販売

資本金：1億3982万円

従業員：9名 (2019年2月現在)

所在地：東京都港区芝5-1-13三ツ輪三田ビル6F

<http://orylab.com/>



### 楽しめる会社

経営者としては、社員の皆にワクワクしながら働いてほしい。そして、彼らに将来「オリィ研究所で働いておもしろかったよね」と言ってもらえればうれしいですね。



行きたいところに行き、つながりたい人とつながるといふ願いを実現するのが分身ロボット



給仕するOriHime-D。「パイロット」と来店客は、内蔵マイク・スピーカーを通じて会話可能だ



分身ロボットカフェDAWNの様子。マスコミでも広く取り上げられ、大きな話題を呼んだ

化症(ALS)などで体を動かすことが困難な人々です。彼らは目の動きだけでPCを操作できるシステム『OriHime eye (オリヒメアイ)』を使い、離れた場所からOriHime-Dを動かしたり、来店客と会話したりしています。

DAWNへの反響は大きかったですね。来店客も盛り上がっていましたし、新たな働き方の可能性に興味を持たれた方も多かったです。そして、パイロットとして働く人々にも楽しんでもらえました。病気によって肉体はベッドに縛りつけられていても、テクノロジーを活用することで心は部屋の外に出られる。そして働いたり他者と交流したりして、自らの居場所を確保することができるのです」(吉藤氏)

### 高速でプロトタイプをつくるのが役割

吉藤氏の役割は「0から1を生み出す」ことだ。困っている人々の希望を聞き、それを解決するアイデアを生み出し、自ら手を動かして素早くプロトタイプをつくる。

「一方、デザインをより使いやすくしたり量産化を行ったりする仕事は、他の方々にお任せしています。その意味で、墨田区の浜野製作所さんなどの他社と連携させていただいていることは、当社にとって大きな強みですね」(吉藤氏)

これまでは、居場所づくりへの支援を行ってきたオリィ研究所。しかしいずれは、居場所での振る舞い方についても手助けできないかと考えているそうだ。

「SNSが登場したことで、人間関係を維持することは易くなりました。でも、人と出会って新たな関係を結ぶことは、未だにハードルが高いと思うのですよ。そこで、同じ趣味を持つ人や互いに気が合いそうな人々を結びつける仕組みや、相手に好感を持たれるツールをつくれなかと考えています。この世には視力を改善する眼鏡や、聴覚を改善する補聴器があるのだから、コミュニケーション能力を改善する新たな福祉機器があってもいいと思うのです」(吉藤氏)

### 取材後記

分身ロボットカフェでは、来店客の方々が楽しそうに交流しているのが印象的でした。その後、パイロットの方からは書籍等の接客販売などもっとさまざまなことにチャレンジしたいとの要望があがっているとのこと。「孤独の解消」というテーマに一貫して向き合う社長の姿がとても魅力的な取材でした。

(経営戦略課 清水美里)